

サッカーにおける出し手の動感に基づくパス発生契機の種類

寺田進志*

Classification of occurrence of pass based on *Kinästhesie* of passer in soccer

TERADA Michiyuki*

Abstract

Soccer players pass a lot. But, is it to say that all of passes are triggered by the decision-making of player. Soccer forms a structure of directional relations with people. Therefore, players can't be free to play. The same thing can be said in passing. In fact, how do pass in soccer? By classifying the occurrence of pass, it is expected to get useful knowledge for coaching how to pass. Therefore, the purpose of this study is to clarify the occurrence of pass based on *Kinästhesie* of passer. To accomplish this, it is necessary to analyze conscious and *Kinästhesie* passer. Therefore, this study is based on *Bewegungslehre des Sport*. And, by a phenomenological analysis (to analyze consciousness and sub consciousness), occurrence of pass is classified. As a result, the following were clarified.

- 1) Pass occurrence of superiority of passer.
- 2) Pass occurrence of superiority of receiver.
- 3) Pass occurrence of passer and receiver when *Kinästhesie* match.
- 4) Pass occurrence of superiority of opponent.

However, passing does not occur based on a single trigger. Passers are influenced by the all of the pass occurrence above. However, as a result, the pass the pass occurrence that influenced the most is the pass occurrence. By this study, we can say that acquired useful knowledge for pass coaching. In other words, the point of view of the observation and the evaluation of the passer are acquired.

Key words: pass, passer, a phenomenological analysis (to analyze consciousness and sub consciousness), phenomenological-morphological movement theory in sport

I. はじめに

サッカー選手はパスを多用している。実際の試合を一見すれば、誰もがこのことを即座に首肯し得るだろう。しかし、すべてのパスは出し手の意志がきっかけとなって発生するといえるのだろうか。言い換えれば、出し手がパスをしたいようにパスをしているといえるのだろうか。

サッカーは「直接的な対人構造」^{3-p.255}を形成している。そのため、当然、ピッチ上に敵と味方が存在する。私たちのチームがボールを保持している場合、敵チームは得点を取られないようにゴールを守り、さらにボールを奪いに来る。たとえば、ボール

保持者がドリブルをしている場合、敵はショルダーチャージやスライディングタックルをすることもあつるし、未然にドリブルのコースを塞ぐこともある。また、ボール保持者がパスをしようとしている場合にも、敵はボール保持者に対して、このような妨害をする。一方で、味方はボール保持者からボールをもらえるように位置取りをすることもあつるし、ボール保持者がパスをする前に走り出してパスを要求することもあつる。ということは、サッカーでは、ボール保持者はすべて思い通りにプレーをしているということではできない。もちろん、これはボール保持者に限つたことではなく、すべての選手にいえること

* 新潟医療福祉大学健康科学部
Faculty of Health and Science, Niigata University of Health and Welfare

である。

すべてのパスは出し手の思った通りに発生するとはいえないのであれば、パスはどのような契機に基づいて発生するのだろうか。パスの発生契機が明らかにされることによって、パス指導の際の有用な知見を得ることができると考えられる。

そこで本研究では、出し手の「地平」^{1-p.88)}を分析することによってパスの発生契機を明らかにし、それらを分類することを目的とする。本研究の目的が達成されることによって、どのようにパスが発生したのかを、観察ならびに評価する視点を獲得ことができ、その観察ならびに評価を基にして、パスをした選手に対して適切な指導をすることができるようになると思われる。

本研究の目的を達成させるためには、「スポーツ運動学」^{5-p.5)}の立場に立脚することが有効になる。なぜなら、スポーツ運動学では地平を分析するための方法、すなわち「地平分析」^{4pp.66-68)}があるからである。この地平分析では、動感力の含意潜在態を背景に隠している地平志向構造を明るみに出すのがねらいになる^{4-p.261)}。すでに、スポーツ運動学の領域において地平分析を用いた研究が実施され^{7,9,14,15,17,18)}、さらにこの分析方法の妥当性が示されている^{17pp.171-173)}。これらの事実から、本研究において地平分析が用いられることに問題はないといえる。

II. 受け手と呼ばれる存在者の考察

パスの成否ないし良否には、出し手の技術だけではなく、受け手のオフザボールの動き方や理解度が大きな役割を果たすのはいうまでもない^{11-p.25)}。出し手がどこにパスを出そうとしているのか、そして受け手がどこにパスが欲しいのかを共有することで、出し手と受け手の関係が成立する^{12-p.15)}。言い換えれば、選手は受け手の存在なしにパスを発生させることはできない。すなわち、サッカーでは出し手と受け手の存在によってパスを発生させることができる。したがって、パスの発生契機を明らかにする前に、受け手に関する考察をする必要がある。

1. サッカー選手に内在する出し手と受け手と呼ばれる存在者

受け手とは、ボールを受ける（もらう）選手を表す言葉である。しかし、受け手と呼ばれる存在者がすでに試合に存在しているわけではない。「サッカー選手は、いわばボールの出し手と受け手の差異化構造を有し、それぞれの存在者に必要な身体知を機能させながらプレーしている」^{16-p.104)}のであり、サッカー選手は自己のなかに出し手と受け手と呼ばれる

存在者を内在させている。

当然、〈私〉がボールを保持していれば〈私〉は出し手である。しかし、この場合、味方はすでに受け手として存在しているわけではない。味方は、あくまで受け手になる可能性を有しているに過ぎないのである。そのため、味方がすでに受け手というわけではない。味方が受け手として存在するためには、受け手になる必要がある。したがって、選手に内在する受け手と呼ばれる存在者になることによって、選手は受け手として存在することができるのである。

では、選手は一体どのように受け手になることができるのだろうか。試合中の選手のプレーを考察すると、受け手になるには二つの契機があると考えられる。一つは自ら受け手になる場合であり、もう一つは出し手のパス発生によって受け手になる場合である。前者は自ら受け手になるため、これを受け手の能動的発生と呼ぶことができるだろう。一方で、後者は出し手によって受け手が変わるため、これを受け手の受動的発生と呼ぶことができるだろう。

2. 受け手の能動的発生

選手は、自らボールを要求することによって能動的に受け手になれる。そして、ボールを要求する方法は五つあるといえる。一つ目は声を出して要求すること、二つ目は視線で要求すること、三つ目はジェスチャーで要求すること、四つ目は動きで要求すること、五つ目はボールをもらいたい雰囲気や要求することである。

一つ目のボールを要求する方法では、「ヘイッ」「出せ」「裏」といったように、声を出すことによってボールをもらいたい意志を出し手に伝える。出し手にとっては味方を注視していなくても、受け手となるようとしている選手の声をきっかけにして、その味方がボールをもらおうとしている意志を感じ取ることができる。

二つ目のボールを要求する方法では、出し手に視線を向けることによって目でボールをもらいたい意志を伝える。いわゆるアイコンタクトは出し手と受け手の目と目を合わせることを表している。さらに、アイコンタクトは出し手と受け手が目と目を合わせるだけではなく、そこからお互いに何をしたいのかを感じることである。アイコンタクトを成立させるためには出し手が受け手を見るだけではなく、受け手も出し手を見る必要がある。また、アイコンタクトが生じる前に、受け手が出し手に対して視線を向けることによって、出し手に訴えかけることもできる。この場合、たとえば「せーの」といったような

合図によって出し手と受け手が同時に目と目を合わせるのでなく、受け手の視線に導かれて、出し手が受け手に視線を向けることでアイコンタクトが成立する。

三つ目のボールを要求する方法は、手を挙げたり、手を進行方向へ差し出したり、手で足元にボールが来るように示したりすることによって出し手にボールをもらいたい意志を伝えることである。たとえば自分の前にスペースがあり、全力で駆け上がってそのスペースでボールをもらいたい場合、手や指でそのスペースを指し示すことによって、出し手にどこでボールをもらいたいのかを伝える。

四つ目のボールを要求する方法では、緩急をつけて走ることで、自分についている敵を剥がすことを出し手に示したり、敵のディフェンスラインの裏へ走り出すことによって、その場所でボールをもらいたいことを示したり、バックステップを踏むことで敵から離れてボールをもらうことを示したりして、出し手にボールをもらいたい意志を伝える。走る方向や走り出すタイミング、走り方などで、どのような質のボールがもらいたいのかを出し手に伝える。

五つ目のボールを要求する方法では、受け手は自身の全体的な雰囲気を出し手にボールを要求する。遠藤保仁に関するインタビューで、当時チームメートの中澤聡太は「(遠藤が) 好調で気持ちも乗っている時は後ろから見ていて分かるんです。そういう試合は、ボールの欲しがり方が半端じゃない。僕が最後尾でボールを持つと、『くれっ』というポジショニングが素晴らしいし、ボールを当てやすいところにいる」^{13-p.91)} (括弧内引用者)、と証言する。このように、受け手はボールをもらいたい雰囲気を醸し出すことによって、味方にボールをもらいたい意志を伝える。この場合、出し手が、その雰囲気を感じ取るが必要になる。そのため、出し手も受け手もお互いにプレーの特徴やくせを知っている必要がある。

選手はこのいずれかの方法、あるいは五つの方法を組み合わせることによって、出し手に対してボールをもらいたいことを要求すると同時に、選手が内在させる受け手と呼ばれる存在者を能動的に発生させている。すなわち、自ら受け手になるのである。

3. 受け手の受動的発生

一方で、受動的に受け手と呼ばれる存在者を発生させる際には、出し手が主導的に味方を受け手にする。では、出し手はどのように味方を受け手にするのだろうか。

出し手が主導的に味方を受け手にするとは、味方に対してパスをすることで、その味方を受け手にならざるを得なくすることである。味方がボールを保持している場合、〈私〉は受け手になる可能性を有しているが、この時点では可能性を有しているにすぎない。しかし、ボールを保持している味方が、〈私〉に対してパスをした瞬間に、〈私〉は「受け手になるだろう」あるいは「受け手になるかもしれない」という可能性から「受け手になる」という確信を得ることになる。たとえばボールをもらう準備をしていなかったとしても、味方に蹴られたボールが〈私〉に向かって来れば、その間に〈私〉は受け手にならなければならない。つまり、〈私〉に対するパスの発生と同時に、〈私〉は受け手になるのである。もちろん、〈私〉は「受け手になるかもしれない」というように受け手になることを予期している場合もあれば、受け手になることを全く予期せずに不意に受け手になる場合もある。このように、味方のパス発生が先行して、それに導かれるように受け手になる場合を受け手の受動的発生と呼ぶ。

4. 受け手の発生契機の違いが次のプレーに与える影響

能動的に受け手になる場合も、受動的に受け手になる場合も、出し手がパスをしなければ受け手になることはできない。そのため、出し手が誰を受け手にするのかの決定権があるといえる。ただし、味方が能動的に受け手になる場合と受動的に受け手になる場合では、受け手がボール保持者になった場合のプレーに影響を与えることになる。

受け手の能動的発生では、受け手は自ら要求することによってボールをもらう。そのため、能動的に受け手になる選手は「次にこうして、こうして、こうしよう」といったことがすでに予期されているはずである。むしろ、「～しよう」という意志があるから自ら受け手になるといえる。つまり、たとえば「ボールをもらってから〇〇へパスをしよう」「ボールをもってからシュートを打とう」といったように、ボールをもらった後にどのようなプレーをしたいのか、しようとしているのか、といったことを思い描いて受け手になる。

ただし、子どもがボールをもらう際の例証に見られるように、次のプレーを予期することができなかったとしても、「ボールをもらいたい」「ボールを触りたい」といった欲求だけでボールを要求することもある。この場合、「ボールをもらって何をしたかったのかい」という指導者の問いかけに対して、その選手はうまく答えることができなかつたりす

る。そのため、指導者は、その選手が自らボールを要求することによって受け手になって次のプレーにつなげようとしているのか、それとも単にボールが欲しいだけなのかを見抜く必要がある。

一方で、受動的発生では出し手のパス発生が先行するため、出し手の意志に導かれて次のプレーへ移行することになる。つまり、パスの発生契機の違いが受け手の次のプレーに影響を与えているのである。

たとえば図1のような場面において、Bがディフェンスラインの裏に動き出して能動的に受け手となる場合、Bはディフェンスラインの裏でボールをもらって、シュートを打つとする。この場合、Bはボールをもらう前の動き、ボールをもらうこと、シュートを打つこと、といった一連の流れをスムーズにつくり出すことができるといえる。しかし、この場面において、出し手のパス発生が先行して不意に受動的に受け手になる場合、受け手は次のプレーを予想していない。そのため、次のプレーへスムーズに移行させることができないだろう。ただし、ボールが自分のところに向かってくる際に、とっさに次のプレーを粗描することもできる選手はいる。

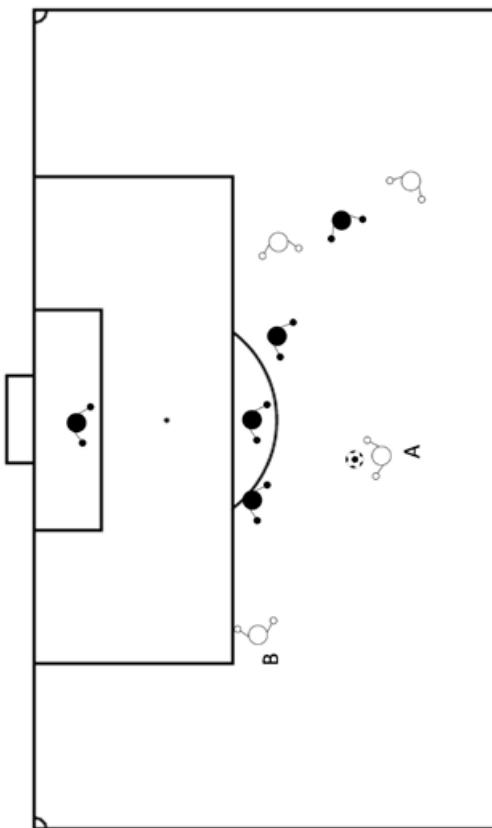


図1 ゴール前のスルーパスの一例

能動的に受け手になる場合、次のプレーが予想されているため、たとえばボールをもらってからシュートを打つ場面では、シュートを打つためのトラップ（ボールコントロール）をすることができる。しかし、予想せず不意に自分のところにボールが来た場合、その選手は受動的に受け手となり、トラップ（ボールコントロール）してからシュートを打つことになる。ただ、ボールスピードが遅ければ、不意に自分のところにボールが来たとしてもボールの移動中に次のプレーを構成することはできる。前者の場合トラップ（ボールコントロール）からシュートまでの動きの流れに継ぎ目はできないが、後者の場合トラップ（ボールコントロール）とシュートの動きの間に継ぎ目が生じる可能性が高い。自らボールをもらおうとしているわけではなく、不意に次のプレーを決断せざるを得ないからである。この継ぎ目が一瞬の間をつくることになり、この間が敵にプレッシャーを与える一瞬の隙となる。このように、能動的に受け手になるのか、それとも受動的に受け手になるのかは、受け手がボールをもらった際の次のプレーに直接影響を与えることになるのである。

III. パスの発生契機の種類

1. パスを発生させる際の出し手の動感の特徴

直接的な対人構造を形成しているサッカーでは、常に出し手が自分のタイミングでパスを発生させているわけではないし、常に出し手のタイミングでパスを発生させることができるわけではない。パスを発生させる場合、必然と敵と味方の影響を受けることになるのである。

一般に、選手は「自分の立ち位置、相手の位置、味方、ボール、スペース」^{10-p.198)}を観てプレーしているといえる。そのため、「誰がどこにいるのか」ということもパスの発生には影響していることは明らかである。この点について、シャビ^{21-p.13)}もパスを出すために「『フィールドのどこに誰がいるのか』を知らなければならない」と指摘している。つまり、敵、味方がいる場所、彼らの位置関係、さらには彼らが何をしようとしているのかが、パスの発生に影響を与えているのである。では、さまざまな影響を受けつつも、出し手は何を契機にパスを発生させているのだろうか。

以下では、パス発生の際の出し手の地平を分析することによって、パスの発生契機を分類する。

(1) 出し手優位

まず、当然のことながら、出し手が自らパスを発生させる場合がある。出し手が「パスを出す」といっ

たことを意識して発生するパスである。このように、出し手が自ら「パスを出す」といったことを意識して発生したパスを、出し手優位のパス発生ということができる。そして、このパス発生の契機は容易に理解されるだろう。

たとえば、出し手がペナルティーエリア付近でボールを保持しているときに、「敵の背後を突くスルーパスを出せば得点を取ることができる」と感じた場合、味方が敵の背後へ走り出していなくてもパスを発生させることがある。この場合、出し手が味方の誰が受け手になるのかを決めて、その受け手を次のプレーに移行させることになる。つまり、出し手優位のパス発生では、出し手が「自分から、自由意志によって」^{19-p.116}パスを発生させるのである。したがって、このパス発生を能動的パス発生と呼ぶこともできる。出し手優位のパス発生では味方が感じていないことを出し手の発生させたパスによって気づかせることができる。

出し手優位のパス発生では、出し手が他の味方が感じていないことを気づかせることによってより良い状況を創出することもできる。しかし、このパス発生の場合、パスを受ける味方は受動的に受け手になり、発生したパスに反応することになる。そのため、受け手は「したい」ないし「しよう」と予期していた場合にはそれを取りやめて、突如現れた状況に動きを対応させることになる。また、不意に受け手になる場合にも一瞬でその状況に動きを対応させることが求められる。この場合、敵の方が早くその状況へ対応した場合にはボールを奪われたり、不利な状況に追い込まれたり、そもそもパスがつかないことになる。

(2) 受け手優位

パスは出し手と受け手との二者の関係が基礎になっている。出し手優位で発生するパスは、いわば出し手のパスが受け手を動かすことになる。一方で、受け手優位で発生するパスは受け手が出し手のパス発生を促すことになる。

ここでも上述した例(図1参照)を引き合いに出すことにする。ペナルティーエリア付近でボールを保持している際に、味方が「敵の背後でボールをもらえれば得点を取ることができる」と感じた場合、その味方は自ら受け手になり、敵の背後へ走り出すといえる。この場合、出し手はその動き出しに合わせてパスを発生させることになる。これが受け手優位のパス発生である。

この場合、受け手の動きによってパスが発生するため、その味方が受け手になるための間ができず、

受け手がボールをもらった瞬間に次のプレーに移行しやすい。受け手が動くことで、「ここに欲しい」とか、「このタイミングだ」ということを出し手にわからせてくれる^{8-p.145}ため、受け手からすれば能動的に受け手になり、パスを自ら引き出すため次のプレーへの移行を滑らかにすることができるのである。

佐藤寿人^{12-pp.31-32}は、中村俊輔に「お前は動き出すタイミングをパスの出し手に合わせすぎている。もっと自分の動きたいタイミングで動き出している。FWからプレーを発信するんだ。…(中略)…オレの動きを見てからお前が動いていたのでは、もっとレベルの高い相手と対戦したときには読まれてしまうし、止められてしまう。だから、ヒサ(佐藤寿人)がほしいタイミングで動き出してくれている。そこにオレがパスを通すから」(括弧内引用者)と指摘されたことを回想している。ワールドクラスのディフェンダーの網を抜けてゴールを奪うには、受け手は「出し手がパスを出す」と感じてから動いていたのでは遅い^{12-p.32}。したがって、受け手がパスの発生契機になる必要がある。

しかし、受け手優位のパス発生の場合、出し手には受け手となる味方の動きを感じ取ることが求められる。また、敵は受け手の動きを見て、誰にパスが出されるのかを先読みすることができる。そして、受け手となる味方の動きに合わせてパスを発生させなければならない。出し手からすると、この「合わせる」ということが極めて難しい。パスを出すタイミングが早くても遅くても通らず、その瞬間でなければパスは成功しない。そのため、出し手はその一瞬を逃さず、さらに実際に身体を自在に動かしてボールを蹴らなければならないのである。

(3) 出し手と受け手の動感の合致

出し手と受け手の動感の合致によるパス発生とは、出し手と受け手が「動感共同体としての〈一つのわれわれ〉」^{5-p.306}を形成することによって発生するパスのことである。

引き続き上記の例を引き合いに出す。ペナルティーエリア付近でボールを保持しているとき、出し手が「敵の背後を突くスルーパスを出せば得点を取ることができる」と感じることに同時に、受け手となる味方が「敵の背後でボールをもらえれば得点を取ることができる」と感じることによって発生するパスが出し手と受け手の動感の合致によるパス発生である。この場合、出し手の「Bに対してパスをする」といった意識作用と受け手の「Aからパスをもらう」といった意識作用が、得点を奪うための動

感形態の発生へ向けて機能している。

したがって、そこには「間動感世界」^{5p.317}が広がっているのである。この「〈間〉」という表現は自己と他者の中間に共通領域が存在していて、その中間領域に両者が入っていくという意味ではない。それは因果的に説明不可能な現象である。つまり、自己と他者の相互に動感化された共働現象の志向体験が本原的に同時に一気に発生するからである」^{5p.305}。そしてそれは、いわば「ゲシュタルトクライスとして同時に発生することになり」、「両者に同時に即興されるものでなければ」ならないのである^{4p.29}。

このような出し手と受け手の動感の合致によるパス発生は連係プレーを形成させる。そして、流れるような連係プレーは敵がボールを奪う隙をなくす。そのため、選手は連係プレーを頻繁に発生させることによって敵よりも優位に試合を進めることができるだけでなく、さらに勝利を近づけることにつながるといえる。したがって、指導者は連係プレーを発生させるためにも、出し手と受け手の動感を合致させるようにパス指導を行う必要がある。

(4) 敵優位

一見、パスは常に能動的に出し手によって生み出されているように思われるだろう。しかし、これまでの分析によって、パスは出し手が能動的に生み出しているだけではなく、受け手が契機となってパスが発生すること、出し手と受け手が動感を合致させることによってパスが発生することが明らかにされた。出し手の地平を分析することによって、一見不可解にも思われる敵優位で発生するパスが明らかにされる。

ここで意味する敵優位で発生するパスとは、出し手が敵のプレッシャーを強く感じ過ぎて発生させてしまうパスを意味する。このパスの最大の特徴は出し手がパスを発生させて「しまう」ことにある。つまり、出し手は「そうしたくなくてもそうせざるを得ない」あるいは「そうしたくなくてもそうになってしまう」ということである。サッカーは対人構造が形成されているため、当然のことながら、選手は敵のプレッシャーを感じながらプレーしている。しかし、選手は意識して敵のプレッシャーを感じているわけではない。つまり、自分がプレッシャーをどう感じているのかに意識を向けているわけではない。したがって、通常、このようなプレッシャーの感じ方は地平に存在している。

しかし、ある限度を超えた場合にプレッシャーは顕在化される。それが、いわゆる「ヤバい」「マズい」といった感じが生じるときである。「ヤバい」ある

いは「マズい」と感じるとき、その選手には危険な状況や不都合な状況が予期される。その危険な状況や不都合な状況を一時的に回避しようとして発生するパスが敵優位で発生するパスである。したがって、敵優位で発生するパスはその場しのぎのパス、と言い換えることもできる。そして、このようなその場しのぎのパスの特徴として、習熟位相の低い選手が頻繁に発生させることがあげられる。

敵優位のパス発生時、出し手は敵のプレッシャーに屈し、出し手には「自分が敵にボールを取られない」といった意識が強く働くといえる。そのため、出し手は受け手のことを意識したり、次により良い状況になることを考えたりする余裕はなくなる。したがって、敵優位で発生したパスの場合、連係プレーは極めて生じにくい。

敵優位で発生したパスは自分が敵にボールを取られないことが優先される。そのため、いわゆるパスの質は二の次となってしまう。結果的に蹴られたボールが味方につながったとしても、蹴られたボールは受け手にとって扱いづらいボールになってしまう。もちろん、受け手のボールを扱う能力が高ければ、パスの質の悪さを意に介さずに次のプレーに移行することができる。しかし、往々にして敵優位で発生したパスを受けた選手にとって、そのパスを自在にコントロールすることは極めて困難である。

2. 極性原理に支配されるパスの発生契機

これまでの分析によって、パスの発生契機を四つに分類することができた。ただし、試合では出し手も受け手も敵もすべての選手がお互いに影響を与え合っている。そのため、どれか一つの契機によってパスが発生しているわけではない。それゆえ、パスの発生契機に明確な線引きができるわけではない。

たとえば受け手がボールを要求し、出し手もその選手にパスを出そうとしていたとする。しかし、出し手にとっては受け手の動き出しのタイミングが少し早く感じたとしても、通れば好機を迎えられると感じればパスをするだろう。この場合、出し手は自分の感じに基づいてパスを発生させてはいるものの、受け手の要求に導かれながらパスが発生したといえる。さらに、そこでは敵も影響する。試合中、(私)は敵の影響を全く受けないことはないからである。

したがって、パスの発生契機は「極性原理」^{4p.213, p.234}に支配されているといえるのである。つまり、パスの発生契機はいずれの契機によってもパスが発生する可能性を有しながらも、出し手、受け手、出し手と受け手、敵のいずれかの影響が他の影響よりも強まることによってパスが発生するというこ

ある。ただ、連係プレーを創発させ、試合を優位に進めていくためには、指導者は出し手と受け手の動感の合致に向けてトレーニングをしていくことが必要になる。

IV. おわりに

本研究では、サッカー選手の出し手の地平を分析することによって、出し手の動感に基づいてパスの発生契機を明らかにし、それらを分類することが目的とされた。本研究の目的を達成させるために、まず、サッカーにおける受け手に関して考察された。受け手とは、ボールを受ける（もらう）選手を表す言葉であるが、味方がすでに受け手というわけではない。自ら、または出し手が主導的になり、味方は受け手になるのである。すなわち、味方は能動的、または受動的に受け手になるということである。

そして、出し手の地平を分析した結果、サッカーにおけるパスの発生契機を、出し手優位のパス発生、受け手優位のパス発生、出し手と受け手の動感の合致によるパス発生、敵優位のパス発生の四つを明らかにすることができ、パスの発生契機を分類することができた。ただし、これらは個々別々に独立しているわけではない。つまり、どれか一つの影響を受けて、出し手はパスを発生させるわけではない。サッカー選手はいずれの影響も受けているのである。いずれの影響を受けつつも、そのなかで最も強い影響がきっかけとなって、出し手はパスを発生させるのである。

本研究によって、出し手がパスを発生させる際の観察ならびに評価の視点を得ることができた。つまり、パス指導の際に、指導者はパスを発生させる際の出し手の動感を観察することによって、出し手優位、受け手優位、出し手と受け手の動感の合致、敵優位、いずれの契機によってパスが発生したのかを判断することができるようになった。そして、それぞれの契機によってパスを発生させた選手に対して、その選手にとって適した指導をすることが可能になるだろう。たとえば、出し手優位でパスを発生させた選手に対して、「受け手が何を考えていたのかをちゃんと考えて、受け手のタイミングも考慮してパスをする必要がある」といった助言を与えることができるということである。もちろん、このような指導は目新しいとはいえない。しかし、サッカーを指導し始めたばかりの指導者、あるいはサッカーを専門としない体育教師にとって、本研究で得られた知見は有用であると考えられる。なぜなら、彼らはパス指導の際の観点を身につけていないからである。また、サッカー指導をしている指導者にとって

は、そのように指導をすることが有効であることの論理的根拠を示すことになった。

ただし、パスの発生契機を判断するためには、観察分析^{3-p.140-151})の能力を向上させることが必要になる。「観察分析は、だれにでもできる分析法ではない」^{3-p.149})からである。したがって、より精確に出し手のパスの発生契機を判断するためには、指導者は自身の観察分析の能力を向上させる必要がある。しかし、どのように指導者の観察能力を向上させるのかは今後の課題となる。

文 献

- 1) フットサル／浜渦辰二訳 (2001)：デカルト的省察, 岩波文庫.
- 2) 金子明友 (2005)：身体知の形成(上), 明和出版.
- 3) 金子明友 (2005)：身体知の形成(下), 明和出版.
- 4) 金子明友 (2007)：身体知の構造, 明和出版.
- 5) 金子明友 (2009)：スポーツ運動学, 明和出版.
- 6) 金子明友 (2015)：運動感覚の深層, 明和出版.
- 7) 宮島 淳 (2010)：柔道における体落としの習熟過程に関する研究—初心者における崩しの促発指導を通して—, 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 35：93-95.
- 8) 中村俊輔 (2008)：察知力, 幻冬舎新書.
- 9) 仲宗根森敦 (2013)：運動の発生障害における動感地平分析の有効性に関する一考察—体操競技における鉄棒の「後方2回宙返り下り」を例にして—, 日本女子体育大学紀要, 43：1633-172.
- 10) 西部謙司 (2012)：「新連載 西部謙司の戦術サミット 第一回 中村憲剛 ボランチのキモチ」, フットボールサミット 第6回 遠藤保仁のサッカー世界を読み解く, pp.1883-201.
- 11) ベラッソ (2011)：「Special FEATURE1 アルゼンチン人が考える理想の動き方」, Soccer clinic, 6, サッカー・コンセプトの基礎知識②オフボールの質を高める, ベースボールマガジン社, pp.243-29.
- 12) 佐藤寿人 (2013)：小さくても、勝てる。幻冬舎.
- 13) 下園昌記 (2012)：「チームメートが体感する背番号7の進化」, フットボールサミット 第6回 遠藤保仁のサッカー世界を読み解く, カンゼン, pp.743-95.
- 14) 田口晴康・豊村伊一郎・吉本忠弘・貞方浩二 (2010)：つり輪の倒立に関する動感地平分析. スポーツ運動学研究, 23：433-54.
- 15) 高岡 治 (2011)：マット運動における後転の動感志向性分析. 伝承, 第十一号：613-76.

- 16) 寺田進志・佐野 淳 (2013) : サッカー選手の動感特性に関する考察. スポーツ運動学研究, 26 : 953-106.
- 17) 寺田進志・佐野 淳 (2017) サッカー選手の〈パスの知〉の地平分析. 体育学研究, 62 : 1693-186.
- 18) 戸高陽子・高岡 治 (2014) : 「けのび」の地平論的構造分析. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 23 : 513-59.
- 19) 山口一郎 (2002) : 現象学ことはじめ, 日本評論社.
- 20) シャビ (2011) : 「SPECIAL INTERVIEW 名選手からのメッセージ」, Soccer clinic, 6, サッカー・コンセプトの基礎知識②オフザボールの質を高める。ベースボールマガジン社, pp.93-13.